

# R

KANSAI  
UNIVERSITY  
NEWSLETTER

Man is a Thinking Reed.

# Reed

No. 42

August, 2015

関西大学ニュースレター

発行日：2015年(平成27年)8月25日  
発行：関西大学 総合企画室広報課  
大阪府吹田市山手町3-3-35  
〒564-8680 / TEL.06-6368-1121  
<http://www.kansai-u.ac.jp/>

この伝統を、超える未来を。

130  
KANSAI  
UNIVERSITY

# SEIICHI KOSHI- MIZU

■リーダーズ・ナウー5  
在学生— 商学部 4年次生  
北川 千博 さん  
卒業生— 阪急電鉄株式会社 都市交通事業本部  
運輸部 宝塚線運輸課  
川田 義貴 さん

■研究最前線  
民主主義の運営についての研究  
抑圧やゆがみのない民主主義国家を追求する —7  
法学部 — 高作 正博 教授  
歴史的建造物の保存・修復  
アンコール遺跡バイヨン寺院の修復 —9  
社会安全学部 — 小山 倫史 准教授

■トピックス [学内情報] —11  
総合型地域スポーツ・文化クラブ「関西大学カイザーズクラブ」を設立  
優れた知財・人材・施設を地域に還元し、地域課題に取り組み  
マルチリンガル・イメージ学習スペースがオープン  
ICTツールを使い、海外大学と異文化交流  
今年も大盛況！関西大学3キャンパスで  
市民参加型のキャンパス祭を開催 ほか

■社会貢献・連携事業／地域連携 —13  
3次元モデルの高精密化に向けた計測技術開発をスタート  
カメラ・レーザースキャナーを搭載した無人航空機で、  
地形データを即時把握  
第21回「かんだい 明日香 まほろば講座」を開催  
明日香村との地域連携事業で、飛鳥時代の天皇陵の謎に迫る ほか

■関大ニュース —15  
関西大学体育会が各方面で大躍進！ ほか

■対談：ブレンダーと教育者に共通する意識

# 優等生ばかりじゃ 面白くない

奥水 精一 サントリースピリッツ株式会社 名誉チーフブレンダー  
楠見 晴重 学長





◆個性豊かな原酒と対話し、生かし方を決める

**楠見** ブレンダーのお仕事とはどのようなものですか？  
**興水** ウイスキーは大麦芽だけを原料にしたモルトウイスキーと、トウモロコシ、小麦などの穀物を原料とするグリーンウイスキーに分かれます。この2つを更に混ぜ合わせてつくった製品がブレンドウイスキーで、世界的には最もシェアが大きくなっています。最近、耳にすることが多くなったシングルモルトウイスキーは、1つの蒸溜所で作ったモルトウイスキー原酒だけを瓶詰めしたものです。ただし、シングルモルトもブレンドしないわけではなく、1つの蒸溜所で作った複数の樽のモルトウイスキー原酒を混ぜてつくります。やはり、いろいろな要素が組み合わさって、初めてうまい酒になるのです。

酵母や蒸溜の仕方、どういふ樽を使って貯蔵するかなどの条件によって、さまざまな個性を持った原酒が生まれます。ウイスキーづくりでは、まず、できるだけ多様な個性の原酒をつくっておくことが大事です。私たちブレンダーは幅広く原酒を組み合わせ、1つの製品ブランドのレシピを創り上げます。

また、新製品の開発の他に、既存製品の維持・管理も行います。それも、ただ品質を維持するだけでなく、5年、10年先も販売され続けることを見越して、製品の品質をどうやって長期的に向上させていくかを考えます。そのためには、熟成中の原酒にはどんな個性の原酒がどれだけ貯蔵されているか、その質と量をきっちり押さえておくことが必要です。そして、将来のためには、今どのような原酒をつくる必要があるかを想定し、要望を現場に伝えます。

具体的な日常は、大半をブレンダー室で過ごし、多くの時間をテイastingに費やします。自らの味覚と嗅覚で原酒を利き分ける、原酒と対話することが、ブレンダーの仕事の最も基本的な作業です。

◆風土と職人氣質が日本のウイスキーを育てた

**楠見** 3年ほど前、スコッチウイスキーの産地として有名な、スコットランドのスペイサイドへ行きました。私は地盤工学が専門で、地下水の研究もしておりまして、専門分野としての興味もあり、あの土地の水を試飲したいと思っていました。スペイ川の水は、周りのビート層から出てくるため、琥珀色をしています。初めてそれを見たときは感動しました。更に口に含んで、この水がスコッチウイスキーには欠かせないものだと思えました。別の有名な産地であるアイラ島にも行きましたが、こちらでもまた全然違う環境と水があり、ウイスキーの味が異なるのだと感じました。

ここ山崎に蒸溜所を建てられたというのは、この地にウイスキーづくりに適した良い水があったということが大きな理由だと思いますが、立地はウイスキーの出来を決める最も大きな要素なのではないでしょうか？

**興水** ウイスキーづくりにおいて水が大きな要素であることは間違いありません。また、10年、20年と原酒を寝かせておく間に、その土地の季節の変化、温度や湿度の変化に影響を受けることも確かです。ですから、私たちがスコットランドのウイスキーづくりをそっくりまねたとしても、絶対に同じ酒にはなりません。

●ブレンダーと教育者に共通する意識

# 優等生ばかりじゃ面白くない

多様な個性が響き合う豊かさを求めて

**興水 精一**

●サントリースピリッツ株式会社  
 名誉チーフブレンダー

**楠見 晴重**

●学長

大阪府三島郡島本町のサントリー山崎蒸溜所に、世界的なウイスキーブレンダーとして知られ、本年度から本学の客員教授を務める興水精一氏を楠見晴重学長が訪ねた。ウイスキーと大学教育、両者は全く異なる分野だが、多様な個性を尊重し、目先にとらわれず長期的な視点で成熟を目指すなど、驚くほど共通する物の見方があった。世界的な品評会の最高賞を受賞した製品のチーフブレンダーを務め、日本のウイスキーを世界レベルに押し上げた立役者の一人である興水氏の職業人としての姿勢に、現在の大学生の学ぶ姿を重ねた。



◀棚一面に並んだ膨大な原酒。ブレンダーの手により1つの製品ブランドのレシピが創り上げられる



■対談

山崎でも、当社のもう1つの蒸溜所がある山梨県の白州でも、できるだけキャラクターの違う原酒をつくろうと相当努力をしてきました。でも、ちょっと遠目に見ると、みんな「山崎」や「白州」という、1つの括りでとらえられるように思います。それは、やはり水や環境がウイスキーづくりに決定的な影響を与えているからで、山崎、白州とスペイサイドでは全く異なるウイスキーの世界が広がっているのだと思います。

しかし、ウイスキーの出来を決めるのは環境だけではありません。水を含めた環境の影響力の上に、私たちがどのような技術をもって仕事をしていくかで、品質は大きく変わってきます。

◆個性派の原酒が、ブレンドに奥行きを与える

**楠見** 興水さんには本学の客員教授も務めていただいて、6月のご講演は私も聞かせていただきました。「ウイスキーのブレディングでは、優等生の原酒ばかりではなく、ある意味、出来が良くない原酒や癖のある個性派を入れることによって、全体の印象が良くなる」とおっしゃっていたのが興味深かったです。

大学もいろいろな学生がいます。その多様性の中で互いに学び合い、切磋琢磨しながら人格が形成されていきます。世の中に有為な人材を送り出していくことこそが、大学の大きな使命であると私は思っています。ウイスキーづくりの現場と教育現場は全く異なる世界ですが、何か通じるものを感じました。

**興水** 出来の良い原酒ばかり混ぜると、酒としては綺麗ですがどうも線が細くなりがちです。ブレディングでは骨太さや力強さ

など違う要素が必要になってきます。欠点が目立つ、ちょっと出来の悪い原酒を混ぜた方が、ブレンドに数段、奥行きというか、味の厚みが出てくるのです。ものづくりをしている者は、ともすると欠点を取り除くという考え方に傾きがちです。しかしそれを続けると、酒はやせていくばかりです。欠点にも見えるような独特な個性が、他の物と響き合うブレンドを考えた方が、ずっと素晴らしい酒が出来ます。そういうことが、ブレンドという仕事を続ける中で、段々分かってきました。

**楠見** 原酒は将来、どんな個性を持つことになるかを予想して貯蔵するのですか？

**興水** ニューポットと呼ばれる蒸溜した直後の無色の状態から、これは長期熟成タイプ、これは早熟タイプ、これは将来この製品に使おうということを考えます。しかし、実際には10年、20年後にどのようなものになるかを正確に予測することは出来ません。同じ日に蒸溜して、同じような樽に入れたとしても、貯蔵庫の積んだ場所が少し違うだけで別の物になります。結局、熟成している樽をチェックして、これは将来「響」の30年になる可能性があるから大事にとっておこうとか、これはできるだけ早く使った方がよいなどと、育ちを見ながら決めていきます。つまり、意図をもって育てるけれども、結果的には育ち具合を見て使い方を決めるということです。

日本の夏はスコットランドに比べて暑いので、原酒の途中経過は細かく見てやらなければなりません。それで、これは思ったより熟成が遅いと分かれば、貯蔵場所や樽を変えます。そういう貯蔵途中での矯正のような作業は、多分スコットランド人はあまりしないと思います。

**楠見** 今のお話から、ブレンドは科学的な知識のバックグラウンドを持ち、それに基づいて答えを出していく技術者であるだけでなく、経験を通じて技能を磨いていく職人的な部分も持ち合わせないと仕事は出来ないのだと感じました。

**興水** 私はスコットランドのブレンドたちとお付き合いがありますが、日本のものづくりはどこか職人的というか、スコットランドとは違うところがあると感じます。特に細部にこだわって完成度を高めようとする、そういう感性は非常に日本人らしい独自のものづくりだという気がします。

◆裾野は広く、追求は一途に仕事を究める

**楠見** 興水さんはブレンドという仕事を究められた方だと思いますが、最初からブレンドを志望されていたわけではないそうですね。

**興水** ものづくりそのものは、将来やってみたくて思っていたのですが、酒造業界は全然、意識したことがありませんでした。今はブレンドという仕事に巡り合えたことは大変幸運だったと思っています。自分のやりたいことや適性は意外と自分には分からないものかもしれません。それでも、いろいろなことを経験しながら、自分に合った仕事にたどり着くものかな、という気がします。

**楠見** 興水さんの場合、ブレンドの仕事が好きだと思えたことが、多分大きかったのではないのでしょうか。若い人は会社の規模や将来性などいろいろ考えて迷うと思うのです。まず何が好きなのかと自分に問いかけることが、進路を決める上では役立つと思います。好きなことをするというのは、キャリアを築く上でやはり重要です。



さまざまな形の巨大なポットスチルが並ぶ蒸留室 竣工当初のウイスキー蒸溜釜

**興水** 仕事を続けていくうちに、自分の新しい面を発見したり、本当にやりたいことが見つかることもあります。私自身はブレンドになったのが、40歳を過ぎてからでした。サントリーの中でも、これは非常に珍しいことです。入社して最初は瓶詰め工場を経験し、その後は研究所で樽や熟成をテーマとして仕事をしました。そして山崎の蒸溜所に異動して、現場の貯蔵や原酒づくりを経験しました。振り返ってみると、ブレンドとしては、理想的なキャリアパスをたどることができました。もっとも、それぞれの仕事をしている最中は目の前のことを一生懸命しているだけで、ブレンドとして良い経験を積んでいるという意識は全くありませんでした。会社も私をブレンドに育てようという長期的な視野で異動させていたわけではないと思いますね。

**楠見** ブレンドになるまでの幅広い現場経験が有益だったのですね。我々研究者は1つのことを貪欲に真つぐに究めていかなければならないところがありますが、それだけでは不十分で、周辺の事柄も研究し、裾野を広く持たなければなりません。そういうところも、ブレンドの仕事と共通しているのではないかと思います。

**興水** ウイスキーづくりという長い年月がかかる仕事をしているから感じるのかもかもしれませんが、若い人は目先の目標にとらわれない方がよいのではないかと思います。ゆっくり、長期的に見て自分がどうなりたいか、自分自身の将来の理想とする姿を遠目にとらえて、目標を考えていただきたい。勉強も、社会に出てからのキャリアも、そういう感覚で歩まれたらどうでしょう。

私がブレンドとしてある程度の仕事できたのも、随分失敗をさせていただいたからです。いろいろな失敗をしないと、人は成長しないですから。若い人はいろいろな経験をし、失敗からどんどん学んでいかれたらいいと思います。

**楠見** 私もそれは学生に常々言っています。保護者の方に対して「お子さんたちに、あえて挫折を味わわせてください」と申し上げることもあります。学長が「挫折しろ」と言うとは何かと思われているかもしれませんが、挫折を知らない人は成長しないものですから。

◆挑戦の連続こそ伝統。世界を魅了し続ける

**楠見** 興水さんは日本のウイスキーを世界のウイスキーまで高めた立役者だと思いますが、日本のウイスキーの今後について、どうお考えですか？

**興水** 日本のウイスキーは世界の5大ウイスキーの1つとして、胸を張れるところまでようやく来たと思います。日本のウイスキーは、もっぱら国内マーケットだけを相手にしてきました。それがやっと本格的に、海外のウイスキーファンに楽しんでいただける時代になったと思っています。これからどんどん積極的な海外展



開が始まると思います。

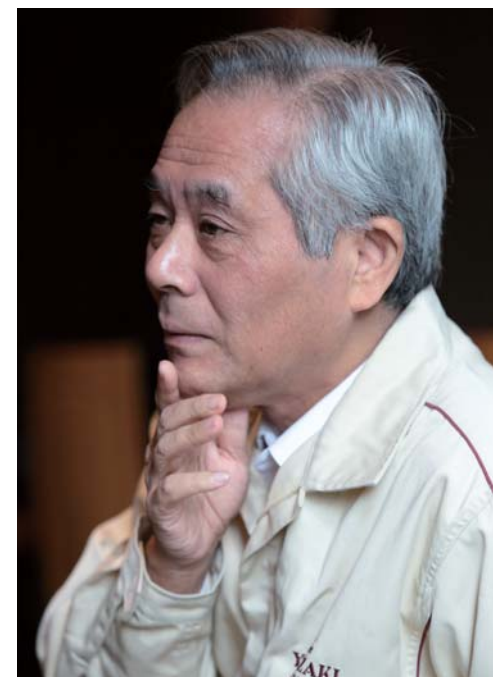
スコットランドのウイスキーづくりは伝統を重んじ、継承していくことを非常に重視しています。私たちは歴史や伝統がない分、彼らがしない新しいことに、いつも挑戦し続けています。そのおかげで、歴史的には90年くらいですが、オンリーワンの世界を作っているのではないかと思います。日本のウイスキーづくりのスタイルが簡単に変わることはないでしょう。日本らしさをこれからもずっと維持しながら、かつ、世界のウイスキーファンに対して新しい物を提供し続けることができると私は思っています。

**楠見** ブレンドを引退され、名誉チーフブレンドとなられて、今後はどういことをされるお考えですか？

**興水** ウイスキーの魅力をもっと多くの方に知っていただきたいので、情報を発信する活動は、これからもずっと継続していきたいと思っています。また、いろいろな挑戦をする若者をバックアップする活動を何かできないかと考えているところです。

**楠見** 関西大学の客員教授として、本学の学生のご指導もよろしく願います。本日はありがとうございました。

欠点にも見えるような独特な個性が、他の物と響き合うブレンドを考えた方が、ずっと素晴らしい酒が出来ます。



**興水 精一** (こしみず せいいち) 1949年生まれ。山梨県出身。山梨大学工学部発酵生産学科卒。73年サントリー株式会社入社。多摩川工場、中央研究所、酒類食品研究所、山崎ディスティラリー(現山崎蒸溜所)などを経て、91年よりブレンド室勤務。99年チーフブレンド、2014年名誉チーフブレンドに就任。「International Spirits Challenge (ISC)」で最高賞を受賞した「響30年」をはじめ、「山崎50年」「山崎35年」「白州25年」などの多くのサントリー・ウイスキーの開発・ブレンドに携わる。04年ISCの審査員に日本人で初めて選出される。15年「ウイスキーマガジン」認定の「Hall of Fame」を受賞。著書に「ウイスキーは日本の酒である」(新潮新書)などがある。



学長が「挫折しろ」と言うとは、何かと思われているかもしれませんが、挫折を知らない人は成長しないものですから。

**楠見 晴重** (くすみ はるしげ) 1953年大阪府生まれ。78年関西大学工学部土木工学科卒業。81年同大学大学院工学研究科博士課程後期課程中途退学。82年関西大学工学部助手。90～91年英国 Imperial College 留学。関西大学専任講師、助教授を経て、2002年教授。07年環境都市工学部教授となり、同年4月から学部長に。09年関西大学学長に就任。文部科学省大学設置・学校法人審議会特別委員、国土交通省道路防災ドクター、公益財団法人大学基準協会理事、一般社団法人日本私立大学連盟副会長、日本私立大学団体連合会副会長、土木学会フェロー会員。主な共編著書に「地圏環境情報学 地下を診る最先端技術」「アジア古都物語 京都一千年の水脈」など。



# LEADERS NOW!

■リーダーズ・ナウ [在学生・卒業生インタビュー]

## 大学ブランド商品の共創プロジェクト構築を目指す

「KUUDLE 関麺」で、関大のブランド力向上を

●商学部 4年次生  
北川 千博 さん

新宿高島屋で開催された第8回「大学は美味しい!!」フェア。全国の大学ブランド商品が集結するこの催しに、関西大学から6つの商品が出品された。その中の1品「KUUDLE 関麺」。つるつるとした喉ごしが特徴のこの蕎麦は、化学生命工学部の河原秀久教授の研究室が開発したエノキタケ由来の「接着タンパク質含有エキス」を活用し、商学部学生チームが創出した事業アイデアを基にメーカーによって商品化された。マーチャンダイジングのチームリーダーを務めたのは、商学部4年次生の北川千博さんだ。



◀ゼミ指導教員の西岡健一准教授(左)と北川さん。フェアでの「KUUDLE 関麺」販売数は約250個。北川さんは、関西大学が出品した全6商品の販売に奮闘した

「まず、理工系の技術シーズ『接着タンパク質含有エキス』と蕎麦の関係に着目しました。つなぎとして入れると喉ごしがよくなる。嚥下機能が低下した人でも食べられると考え、介護施設等で蕎麦の需要を調査しました」。商品名を「KUUDLE 関麺」とし、ビジネスモデルの考案や店舗レイアウト、ポップの作成等はマーチャンダイジングを研究する3年次生が担当。北川さんはその指揮を執ることと会場での販売を担った。「昨年、『不凍タンパク質含有エキス』を用いたビジネスモデルの創出に取り組んだのでビジョンは見えており、指導はスムーズにできたかと思えます。それよりも大変だったのは販売。商品売るのこんなに難しいのかと愕然としました」。

販売当初は、高度な技術を使っているのだから売れるだろうと楽観視していた北川さん。しかし実際は、「普通の蕎麦とどう違うの?」「エノキタケが入ってるの?」等、お客様の質問に答えなくては売れない。「食感が違い、喉ごしがつるつるです。エキスが入っています」と特徴を説明するも、反応は今ひとつ。そこで思い出したのが、ゼミ活動での西岡健一先生の言葉「価値は何だ?」。高齢者も小さな子供も、安全、安心に食べていただけることを説明すると、買ってもらえるようになった。「セリング(販売)には時間や労力、コストも多く掛かる。マーケティングの重



北川 千博—きたがわ ゆきひろ  
■1993年滋賀県生まれ。滋賀県立大津高等学校卒。商学部4年次生で「ビジネスリーダー特別プログラム(BLSP)」に所属。大学ブランド商品「KUUDLE 関麺(くーどるかんめん)」の事業化に取り組む。中小企業の課題を調査研究する「Mラボ課題解決ラボ」をはじめとした様々な産学連携・文理融合プログラムにも積極的に参加。

要さを思い知らされ、経営学者ピーター・F・ドラッカー氏の言葉「究極のマーケティングとは、セリングを不要にすることだ」を実感しました」。

北川さんは卒業論文チームで「KUUDLE 関麺」を用いて新しい価値共創システムを研究するプロジェクトも進めている。時代と共に広告の在り方も変容し、市場も新規顧客の獲得ではなく既存顧客とのコミュニケーションの取り方が重要視されてきている。次代を担う若者が活用するSNSを介し、顧客とどう関係性を持ち、どのようなコミュニケーションを構築するか、口コミの伝播やプロモーション効果の上げ方等を研究中だ。「販売の現場に立ったことで、お客様がどのような言葉に反応するかを間近に見ることができました。家族連れが多く買ってくれたという予想外のデータも取れ、得たものは大きいです」。共創するなら関西大学の卒業生の方と進めたいと考え、今はリアルな場からSNSへの誘導を視野に入れ、拡散に影響力のありそうなSNSやマスコミ関係の方々との接点作りを始めている。「前例がない中でフェアへの出品を行い、自ら考え、仮説を立て、課題を掲げて研究すること、リーダーシップを発揮してプロジェクトを進めること等が身に付いたと感じます。これらを生かして大学のブランディングに少しでも携わり、4年間お世話になった恩返しが出来れば」と、目を輝かせる。今後は大学院へ進み、マーケティングの研究を続け、将来はプロフェッショナルとして様々な企業活動に関わっていききたいと力強く語ってくれた。



第8回「大学は美味しい!!」フェア(5月28日から6月2日まで新宿高島屋において開催)

## 現場から信頼される統括者を目指して

積極的なコミュニケーションでよりよい職場づくりを

●阪急電鉄株式会社 都市交通事業本部 運輸部 宝塚線運輸課  
川田 義貴 さん —経済学部 2010年卒業—

大阪梅田と神戸・宝塚・京都を結び鉄道事業を中核とする都市交通事業、沿線価値の向上と梅田エリアの活性化を推進する不動産事業、宝塚歌劇の運営等を行うエンタテインメント・コミュニケーション事業など幅広い事業展開を誇る阪急電鉄。都市交通事業本部に所属する川田義貴さんは、宝塚線で駅員・車掌・運転士として働く運輸現業職約500人を統括する人事係を担っている。

幅広い事業を生かした総合的な沿線開発を行う阪急電鉄。曾祖父、祖父、そして父親も代々鉄道会社勤務という川田さんは、当然のように鉄道会社の仕事内容に興味を持った。「父親に、鉄道会社には鉄道だけではなく多くの事業フィールドがあり、その事業の運営にかかわることができる総合職という職種の魅力を感じました。その中でも私鉄経営のパイオニア的存在である阪急電鉄に憧れると同時に志望する気持ちが強くなりました」。

阪急電鉄及びグループにおける経営を担う幹部候補生として採用され、同期入社は19人。新人研修で本社業務等を経験した後、川田さんは運輸部に配属された。ゆくゆくはマネジメント業務に携わるため、現場の業務内容を理解しておく必要がある。すぐさま車掌業務の研修がスタートした。車掌を経験し、次は運転士の研修。運転士の国家資格を取得した後、半年間、宝塚線の運転を任された。「運輸現業職の場合は、最短でも駅員を2年、車掌を3年経験してから運転士の資格を取るため、各研修での同期は30歳前後の方ばかり。鉄道に関する知識量が全然違うので、初めはついていくのに必死でした」。

入社して6年目。現在は宝塚線の運輸現業職を統括する運輸課で、人事労務管理を担当する。「私の仕事は本社と現場をつなぐパイ役。鉄道事業には、安定的な輸送サービスの提供が求められており、それを妨げるさまざまなファクターが潜んでいます。それらを表面化させないよう、近畿運輸局や本社からの通達を社内規程に基づいて現場に周知・徹底させ、安全を確保しています。また、人員配置や要員管理等の業務を行い、異常時には陣頭指揮をとることもあります。細かな日常業務をいかにコンパクトに終わらせて、人身事故や自然災害等、不測の事態に対応できる体制を整えておくのが重要だという。「たとえ若くても現場の従業員から見れば責任者。私が間違っただけで指示をすれば、それがすぐに現場へ広がり、混乱を招くため慎重かつ責任を持って言葉を発するように心がけています。川田なら何とかしてくれると現場に信頼してもらえる人間になりたいですね」。



川田 義貴—かわた よしたか  
■1988(昭和63)年、京都府京都市生まれ。2010年関西大学経済学部卒業。同年、阪急電鉄株式会社に総合職として入社。都市交通事業本部運輸部宝塚線運輸課に配属となり、車掌や運転士等の現場研修を経て現職。

大学時代、川田さんは体育会アメリカンフットボール部で副将を務め、2009年の甲子園ボウルでは62季ぶりの優勝という偉業を達成した。「アメフトはコミュニケーションが重視されるチームスポーツ。100人近くの部員をまとめるのは相当難しいものですが、人に物事を伝えたり、動いてもらえるよう働きかけたりする統率力が身に着いたように思います」。職場でも従業員全員の顔と名前を正確に覚え、レクリエーションや懇親会等にも積極的に向かい、多くの人と交流するよう心掛けている。「将来的にはより重責を担う人員配置等、人の人生を左右するような判断を迫られる立場になります。今から従業員一人ひとりのパーソナリティを把握し、体調やメンタル面、人間関係等さまざまな事象も考慮した上で、より働きやすい環境を作っていけるようになります」。宝塚線の総合職は川田さんを含め3人。4年上の上司を目標としている。「阪急電鉄の一步先を行く事業スタイルは創業時からのDNA。この会社で活躍する上司の姿は、今の自分の実力を気付かせてくれる指標。先輩方のような統括者になれるよう成長していきたいです」。





■研究最前線

民主主義の運営についての研究

# 抑圧やゆがみのない 民主主義国家を追求する

憲法における普遍的原理の徹底に向けて

●法学部  
高作 正博 教授

11年間、沖縄の琉球大学で研究生を送り、平和主義や米軍基地問題に携わった高作正博教授。いかにして憲法の普遍的原理を徹底させ、現実とのギャップを埋めていくのかを考える一方で、2年間、パリ第2大学へ留学し、自身の研究テーマであるフランス憲法学も追求してきた。それらの経験を踏まえ、日本の民主主義に対する運営上の問題やその解決法を提唱する。



- ▲高作教授の著書・共著
- 『フランスの憲法判例 III』(2013年、信山社出版)
  - 『21世紀版 わたしの憲法手帳 第5版』(2015年、沖縄県憲法普及協議会)
  - 『平和と人権の憲法学：「いま」を読み解く基礎理論』(2011年、法律文化社)
  - 『徹底批判！ここがおかしい集団的自衛権』(2014年、合同出版)

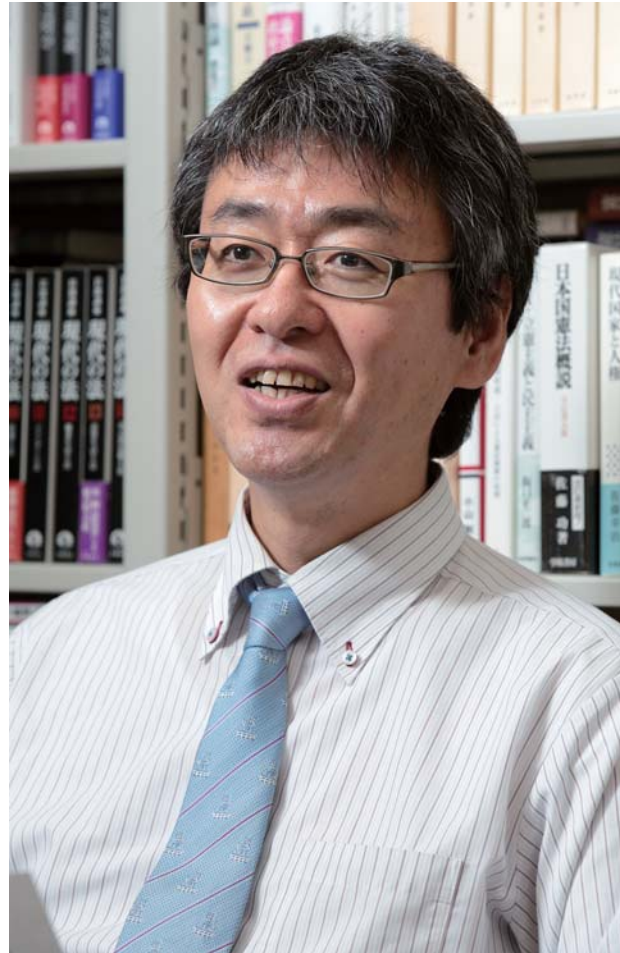
■他国から見る日本の民主主義とは

—先生はフランスへの留学経験をお持ちですが、諸外国と日本の民主主義の在り方に特徴的な違いはありますか？

日本と違い、フランスもアメリカもしっかりと議論をします。意見をぶつけ合って納得するところは納得し、納得できない部分は継続して議論する。日本は対決する前に議論を避ける傾向があるので、ぶつかるといふプロセスがありません。対決しないことで人間関係を円滑にするというメリットがある反面、結論を先送りするだけで、いつまでも問題が決着しないというデメリットがあります。

—今、日本で注目されている集団的自衛権の行使について、フランスではどのように報道されているのでしょうか？

現地のニュースや新聞では、日本のことをあまり伝えていないというのが現状です。集団的自衛権の行使については、「現在の安倍政権になり、日本の傾向が良くも悪くも今までとは違う」ととらえられています。危機感を持って見ている人や、何が起きているのかわからないという見方をしている人もいます。フランスは、基本的に軍事は必要という考え。軍を持たないという思想は斬新と受け止められているところはありますね。



■民主主義の運営における抑圧とゆがみ

—日本では民主主義運営上のルールとして、何を基本として抑えておくべきだとお考えですか？

人間は価値観や立場、主義主張等、すべてが異なる存在の集まりです。民主主義とは、誰が権力を持ってても同じルールの下でそれを使い、そのルールを維持することにより共存・共生を可能にする営みのこと。もし、誰かが権力を持った途端、一方的にルールを変更したらどうなるのか？野球に置き換えると、阪神タイガースのファンに「阪神が攻撃に回ったからルールを変えよう」と言ったら納得するでしょうか？「それはやってはいけないよ」と間違いの指摘をファンや支持者だからこそ言えることが大切です。誰が攻撃に回ってもルールは変更しないということが基本だと思います。憲法学において、今まで制度面の議論が多かったですが、どのように民主主義が作用され、どのように運営すべきかという側面から全体を見る必要があります。

—民主主義国家として、現在の日本における問題点とは？

今の日本では民主主義の抑圧やゆがみの問題が生じています。抑圧の問題には、裁判を利用した「スラップ訴訟」があります。これは国や大企業が公的問題について批判的な発言をした人を標的に提訴するというもの。勝敗は関係なく、判決が出るまでの数年間、比較弱者や一個人である被告を黙らせることを目的とし、研究者やジャーナリスト、市民運動に関わる方等が被害に遭いやすいと言えます。アメリカでは法律等で歯止めをかける議論がなされていますが、日本にはそれがなく、原告の主張が容認されてしまっています。



ゆがみ問題には、民意を利用した「引き下げ民主主義」や「モラルパニック」があります。「引き下げ民主主義」とは、他者が自分よりも得をしているのではないかという雰囲気を利用し、既得権や特権を批判・攻撃し、公共サービスの切り下げに利用するというもの。例えば、生活保護に対するバッシング。受給者が日頃からパチンコをしている等、ごく一部の人をクロズアップし、監視対象にしたり保護費の切り下げを行おうとしたりする動きがあります。そして、「モラルパニック」とは、特定の人達が危険をもたらすとして攻撃的な扱いを受けてしまうというもの。日本では比較的少ないですが、アメリカでは同性愛者やシングルマザー、未婚女性が逸脱集団としてレッテルを貼られ、批判や排除される現象が見られます。

それからもう一つ、ゆがみ問題として、住民投票や国民投票を利用した「プレビシット」という悪しき運用形態が生まれることもあります。これは、住民投票や国民投票という民主主義の中で最も個人に決定権のある制度において、本来は政策の是非を巡って議論すべきところを、「あの政治家が言う政策だから賛成しよう」と、人物の評価、好き嫌いが結果に結びついてしまうというものです。歴史的には、フランス革命期のナポレオンによる人民投票がこれにあたることされ、戦争の勝者、英雄であるナポレオンだからと皆が票を投じた結果、国家は独裁制、帝政へと移行したと言われています。

■有権者としてできること

—そのような抑圧やゆがみに陥らないために、私たちはどのようなことに注意すればよいでしょうか？

民主主義は個人が主役なので、一人ひとりが気を付けて物事を判断する必要があります。自分の結論が出ているとしても、一度違う立場に立ち、そこから自分の立ち位置を見直して、どうい議論があり得るのか応酬をすることが大切です。

また、住民投票等の際に私達が気を付けるべきことは、政策の是非が人物に対する評価と混ざらないようにすること。誰が提案したかで結果が左右しないよう意識することです。フランスではプレビシットに陥った経験を踏まえ、もともと誰が政策を提案したのかわからなくなるところまで議論を継続してから運用するという考えが主張されています。そのため、むやみに結論を急がない。投票日を先に決めてしまうとそこへ向かって結論を出そうとするので、日本もそうならないよう、提案者が前面に出ないよう工夫することが必要だと思います。

—この度、18歳選挙権が実現しました。有権者一特に若者にはどのような視点が必要だとお考えですか？

今の時代、情報源としてインターネットを使うことは必至ですが、自分に都合のよい情報のみを抽出するのではなく、異なる意見にも目を向け、何が事実なのかしっかりと見極めることが大切です。また、様々な社会問題に関心を持ち、感情で反応するのではなく、事実や



▲野球のグローブを握ると自然と笑顔になる

理屈で冷静に考える訓練も必要だと思います。それには人と話をし、読書をする。本を批判的に読んでみて、書き手と自分とで対比してみる。ニュースやインターネットの情報も批判的に考えてみる。こうして自分と異なる立場との対話を積み重ねていくと、考え方を鍛えることができます。自分の立場を明確にすることは、対立する可能性も生まれ、怖い面もある。しかし、その壁を越えることが重要であり、議論により生まれたつながりを大切にしてほしいですね。

—今後の展望をお聞かせ下さい。

今、憲法が大きな関心を集めています。本来、憲法は空気のような存在で、目に見えなくても皆が安心して暮らせるためにあるもの。脚光が当たる状況というのはある意味、危機的な状態です。



講演会の様子

私は民主主義の運営を後退させないためにどうしたらよいかを憲法学の観点から発信したいと考えています。また、最近講演会等に招かれて話す機会を多く頂いています。その際、個人的な主義主張ではなく、立憲主義の歴史や思想を客観的に語ることで「では、現状をどのように考えますか？」と、現状に対するメッセージを送っていきたくと思っています。



研究最前線

歴史的建造物の保存・修復

# アンコール遺跡 バイヨン寺院の修復

掘削工事に伴う構造物・地盤の挙動を解析

●社会安全学部

小山 倫史 准教授

カンボジアの世界遺産・アンコール遺跡群は、歴史的、美術的に価値の高い壮大なスケールの建築や彫像で、世界中の観光客を魅了している。各国による調査、保存、修復が進められる中、代表的な遺跡の一つ、バイヨン寺院では日本チームによる活動が成果を上げている。小山倫史准教授は、地盤・岩盤工学の専門家としてこの活動に参加、これまで培ってきた高度な解析手法を利用し、遺跡の変状メカニズムを精緻にモデル化することに成功。精度の高い変状予測で保存修復に貢献している。

●アンコール遺跡バイヨン寺院



## 地盤・岩盤工学の専門力を遺跡修復に生かす

—カンボジアのアンコール遺跡の修復事業にかかわられているそうですね。

5年ほど前から、日本国政府のアンコール遺跡救済チームに協力して、年1~2回程度、ゼミの学生などと現地に出向き、現地の日本人・カンボジア人スタッフとともに、バイヨン寺院などの保存・修復に携わっています。

バイヨン寺院は、12~13世紀にかけて建造された遺跡で、原地盤の上に、適量の水を土に加えて突き固めた版築と呼ばれる盛土地盤を10数メートル造り、その上に石積みの構造物が幾つも建てられています。最も大きな構造物である中央塔は、版築盛土の基壇と合わせて、高さ40メートル以上にもなります。

何世紀もの時が経過すると、構造物が傾斜したり、石積みの間の目地開きや石材の亀裂が起ります。石積みの応力が集中するような場所では版築の地盤が破壊していたり、版築土が開いた目



地から流出するなど、劣化・変状が進んでおり、特に石積みの崩落などを防ぐために対策が必要になっています。

—専門は地盤・岩盤工学ですね。どうして遺跡修復にかかわることになったのですか？

アンコール遺跡のこれまでの調査や修復から、構造物の崩壊が起こる一因として、基礎となる地盤の変状が考えられています。つまり、保存修復を進めていく上では、構造物だけでなく、地盤との相互作用も考慮しなければならないということです。

私はもともと岩盤工学の専門で、現在では、地滑り、斜面崩壊の監視・予測、土砂災害の警戒システムの構築といった課題にも取り組んでいます。岩盤を対象とした不連続体(ブロック体)解析手法の開発を行ってきました。そのような研究が、地上の構造物と地盤の両方を扱わなければならない修復に応用できるのではないかと、ということで、私に声が掛かったようです。

実は私の父は日本中世史の研究者で、熊野古道の世界遺産登録に力を尽くしていました。アンコール遺跡の話をしていただいた時には、父はもう他界していましたが、私も世界遺産にかかわれるということに何か縁を感じ、ぜひ手伝わせていただきたいと思いました。

## 地盤と塔の複雑な動きを数値解析

—どのような作業を担当されているのですか？

遺跡の変状メカニズムを解明し、保存修復作業がどのような影響や効果を与えるのかをシミュレーションできるように、地盤と構造物の動きを数値シミュレーションで解析することを試んでいます。

地上の建物、地盤のどちらかだけを解析することはよくありますが、両者の間の相互作用も考慮し、両方を同時に扱う解析手法はなかなかありません。バイヨン寺院の場合は、地上の構造物は石積みの不連続体、地盤は連続体としてモデル化し、それらの相互作用を組み入れ、最終的に両者を同時に解析するので、かなり複雑な計算になりますが、石積みと地盤の挙動をうまく表



バイヨン寺院における発掘調査



バイヨン寺院の基壇部のボーリングによりサンプルを採取  
表層から砂岩(写真左上の灰色部分)、ラテライト(赤茶色の部分)、版築土



細かい粒子の砂に水を加え突き固める工法で、版築と  
呼ばれる盛土をテストサイトにて再現

現することができました。

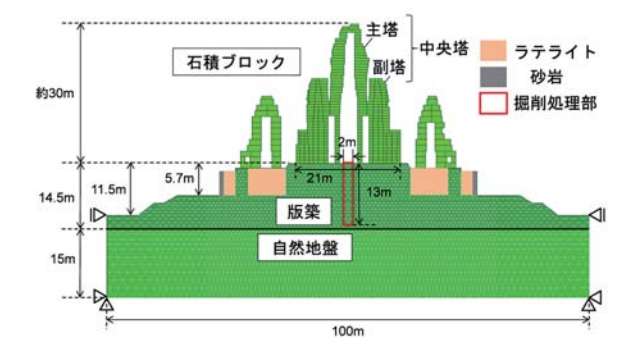
—解析をするためには、構造物や地盤の特性を調べなければならなかったのでは？

自然地盤については、近くを掘削してサンプルを採取、版築地盤については、実際と同じ水と土の配合になるよう自分たちで締め固めて再現しました。石積みの石材(砂岩やラテライト)は同じ材質の石を使い、いろいろな試験を行ってそれぞれの物性を決定し、その数値を解析に反映させました。

## 修復作業の影響を予測する

—その解析手法を具体的にどのように利用したのですか？

解析が最も必要だったのは、バイヨン中央塔です。この塔の中央の版築地盤には、かつてフランス極東学院が調査のために掘った坑を埋め戻した箇所があります。その埋め戻し土の状態は緩く、今後、塔の安全性を脅かすことが懸念されているため、もう一度掘り返し、補強して埋め戻し作業が検討されています。しかし、そのような工事をする前に、周囲の地盤や塔に与える影響を検証しておかなければなりません。そこで、いろいろな地盤補強



▲バイヨン寺院中央塔の掘削時挙動解析モデル(二次元平面ひずみ)

工法について検討し、その効果を調べるための解析を行い、工事を行う際に留意すべきことを考察しました。

ただ、この解析は雨など地下水の影響を考慮に入れていない力学上の計算です。例えば、土は含水量により性質が変わることを表現できるように、学生たちと改良した解析コードを現在作っているところです。カンボジアは雨期乾期があり、乾湿の繰り返しは地盤にダメージを与えます。そういう条件もうまく表現できるものにしたいですね。地盤や石材のサンプルによるさまざまな試験データを蓄積し、解析の精度を上げていきたいと思っています。

また、石積みの目地開きの進行などの現状把握を正確に行うことも重要です。そのために、精密写真測量を用いた計測・モニタリングを継続して行っています。精密写真測量は、小さな反射ターゲットを石積みに貼り付け、それを定期的に撮影したデータから石積みの動きを把握する計測方法です。写真を撮るだけで誰でも簡単に計測できるというメリットがあり、私たちが日本にいる間は、現地のスタッフが撮影したデータを送ってもらっています。

## 日本の土木技術は世界に貢献している

—そもそも、地盤・岩盤工学に興味をもったきっかけは？

大学受験の年に、阪神・淡路大震災がありました。センター試験を受けた2日後でした。もともとは建築を志望していたのですが、想像を超える災害に遭遇して、「何とかしたい」と感じたことと、土木工学科に入学後、建築や都市計画には依然興味がありましたが、構造や地盤、水理などより“土木らしい”分野に興味を覚え、地盤・岩盤工学を専攻しました。そこから現在の研究につながっています。

—今後の抱負をお聞かせください。

バイヨン寺院以外に、タイ国境近くのプレアピヒア寺院の修復の話もあり、まだ当分はカンボジアにかかわっていくことになりそうです。社会安全学部ですから、防災・減災の研究も力を入れ、例えば、高レベル放射性廃棄物の地層処分といった課題にも取り組んでいきます。いろいろ手広くやっていますが、学生には土木の面白さを伝えていきたいですね。また、日本の土木技術が世界各地で役立っているということも知ってほしいです。

最近はグローバルな人材にならなければいけないと声高に言われていますが、そんな話題が出てくるずっと前から、日本人は世界で活躍していました。日本の遺跡保存・修復活動では、「自分たちの手で自国の文化を守る」というメッセージの下に、現地の技術者と一緒に活動しながら日本の技術を伝授しています。良き日本人の文化を大切に、今後も海外と交流し、貢献できれば私は思います。



# Topics ■トピックス [学内情報]

総合型地域スポーツ・文化クラブ「関西大学カイザーズクラブ」を設立 KAISERS CLUB

## 優れた知財・人材・施設を地域に還元し、地域課題に取り組む



今春、関西大学は創立130周年記念事業の一環として、「特定非営利活動法人 関西大学カイザーズ総合型地域スポーツ・文化クラブ」を設立した。

大学の知財・人材・施設を基にスポーツ・文化スクールを運営し、青少年の健全育成、社会におけるコミュニティー作り、健康で豊かな生活の醸成などの地域課題に取り組んでいく。

組織は大学・地域住民・校友・保護者により構成され、多世代、多目的、多志向をキーワードに、関西大学が地域に根差した大学へ成長することを支援していく。



サッカースクール

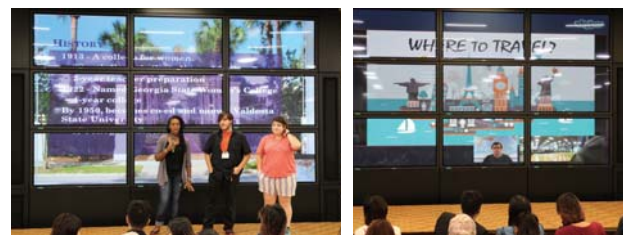


アイスホッケースクール

既にサッカーとアイスホッケーのスクールを開講しており、2016年はチアリーディング、テニス、2017年にはバスケットボール、ママさんバレー、以降は音楽関連サークルや放課後サークル(学童系)の開講も予定している。

マルチリンガル・イマージョン学習スペースがオープン Multi-Lingual Immersion Room

## ICT ツールを使い、海外大学と異文化交流



▲凧風館で開催されたプレオープニングイベントの様子

関西大学では、学内留学ができるグローバル空間として、「マルチリンガル・イマージョン学習スペース (Mi-Room)」を総合研究棟1階に開設した。

Mi-Roomは、外国語による異文化コミュニケーションを身近に体験することで、グローバル意識を高め、将来的な留学や外国語を活用した就職・進路を実現するための支援を行う空間。具体的には、①海外の大学と連携し、情報通信技術 (ICT) ツールを用

いて海外の教育機関と交流学习する COIL<sup>※</sup>授業の開講、②留学生や国際交流のエキスパート、留学経験者による語学レッスンや留学準備の支援、③異文化に触れ、英語で学び交流するアクティビティを展開する。

6月18日にはプレオープニングイベントが開催され、本学学生の英語による司会の下、施設紹介や留学生によるプレゼンテーション、Skypeを利用した遠隔交流のデモンストレーションが行われた。また、7月15日には、映画『Toilet』(荻上直子監督 2010年ショウゲート・スールキートス配給)の上映会と映画についてのディスカッションが行われた。今後も多彩なイベントを企画している。



▲「言葉を使う、使わないなど、コミュニケーションの方法は色々ある」と映画を観た感想を語る学生たち

※ COIL…Collaborative Online International Learning (オンライン国際交流学习)

千里山キャンパスに新しいアクセス・エリアを創出



## 利便性と快適性を求めたアプローチに

千里山キャンパスへの新しい玄関口として、阪急関大前駅北口の東側に、大学への新たなメイン通路を開設する。それに伴い、エスカレーターや憩いの広場を設け、植樹による緑のキャンパス空間をスマートに演出するなど、学生や地域住民の人々の利便性・快適性を高め、安全・安心で人に優しいアプローチを造成する。

この新たなアクセス・エリアの創出により、地域と大学が共に発展できる「まちづくりの推進」にも取り組んでいく予定だ。

▲新アクセス・エリア完成イメージ図

## 今年も大盛況! 関西大学3キャンパスで市民参加型のキャンパス祭を開催

● 2015年度高槻キャンパス祭  
学生と市民が多彩な催しで交流



5月31日、総合情報学部祭典実行委員会が企画・運営する高槻キャンパス祭2015が開催された。21回目を迎えた今年のタイトルは「紫陽花祭(アジサイ)」。たくさんの花が集まることで、より一層輝くことができる紫陽花をテーマに、学生による模擬店や研究発表、フリーマーケット、各種ステージ企画、応援団による演舞など、さまざまな催しが行われた。

また、視聴者参加型スタジオ体験イベント「相羽博士の公開実験～Move to the TV～」や、井浦崇准教授による講演「琳派～モダン・アート・デザイン、音楽～」なども行われ、キャンパス一帯は終日大盛況。来場者数は約3600人にもものぼり、紫陽花のように鮮やかな笑顔がいたるところで咲き乱れていた。

● 第5回堺キャンパス祭  
地域とつながる楽しいイベントが満載



6月7日、堺キャンパスでは、人間健康学部祭典実行委員会を中心に第5回堺キャンパス祭を開催した。テーマは「堺キャンパスや さかい!!～SAKAI市民交流の場～」。

ステージ企画や模擬店、人間健康学部教員によるワークショップの他、毎年好評のNPO法人主催「みんなであそぼう」やフリーマーケット、地域の子も達とのスポーツ交流、ゼミの研究発表など、世代を超えて楽しめる催しが数多く行われた。当日は、約2500人も来場者があり、テーマの通り、学生のみにとどまらず、堺市民の人々と共に盛り上がり、親睦・連帯・交流を深める人間健康学部らしい一日となった。

● 第1回高槻ミュージックキャンパス祭  
楽しみながら学ぶ体験型企画が満載



6月21日、第1回高槻ミュージックキャンパス祭が開催された。このイベントは、例年6月に開催の「安全フェスティバル」と、11月に開催の「キャンパス開放デー」を合体させ、更にパワーアップさせたもの。「楽しく防災を学んで伝えよう」をテーマに、祭典実行委員の学生をはじめとした社会安全学部生が運営に携わった。当日は、自衛隊や警察を招いての企画や、防災の知識を盛り込んだ参加型イベントなど、多数開催された。

学生による模擬店の他、卒業生である元フィギュアスケート選手の織田信成氏による講演会、中・高・大学の吹奏楽部総勢100人で演奏するコンサートなど、多彩なイベントも行われ、約3000人の来場者とともに大いに盛り上がった。



◎3次元モデルの高精度化に向けた計測技術開発をスタート

## カメラ・レーザースキャナーを搭載した無人航空機で、地形データを即時把握 ●産官学連携事業・大学カイザープロジェクトS



◀◀ 無人航空機 (UAV: Unmanned Aerial Vehicle)

関西大学は4月、産官学の連携事業として、関西大学カイザー・プロジェクトS「高度空間計測技術開発コンソーシアム」を発足した。事業期間は平成27年4月から10年間。

総合情報学部の田中成典教授らによるこのプロジェクトは、無人航空機(UAV)を用いた点群データの計測システム技術とデータ処理技術の開発、運用モデルの設計・提言が目的。UAVにカメラと3次元計測が可能な小型レーザースキャナーを搭載し、正確に素早く地形データを取得する計測技術の研究・開発を行う。レーザースキャナーの搭載により、従来に比べて10倍以上の作業効率向上が見込めるほか、レーザ測量による点群座標データとカメラで撮影した写真データを組み合わせることで、約2倍精密な

3次元モデルを生成することが可能となる。既存のUAV活用技術はハード・ソフト共に海外製に頼っているのが現状だが、本コンソーシアムでこれら技術が確立し、将来普及すれば、災害現場において迅速で正確な状況把握に役立つほか、建設分野での測量や建造物の品質管理などにも利用できるとして国内の建設産業において大きな期待が寄せられている。

プロジェクト発足に伴い、5月27日には関西大学東京センターで特別セミナーも開催され、本学からは研究担当者である田中教授と環境都市工学部の窪田論准教授が講演を行った。来場者は150人を超え、盛況のうちに終了した。

無人航空機(UAV)を用いた3次元モデル

撮影した画像データから専用ソフトで作製した点群座標データ。地表測量を行うレーザプロファイラと組み合わせることで約2倍精密な3次元モデルを作製することが可能



奈良県北股地区



関西大学



奈良県大和川多聞橋

◎第21回「かんだい 明日香 まほろば講座」を開催

## 明日香村との地域連携事業で飛鳥時代の天皇陵の謎に迫る



約700人が参加した第21回「かんだい 明日香 まほろば講座」

関西大学と奈良県明日香村との共催(朝日新聞社後援)による第21回「かんだい 明日香 まほろば講座」が7月12日、東京・有楽町朝日ホールで開かれた。

関西大学と明日香村は、1972年に始まった高松塚古墳の発掘以降、緊密な関係を築いてきた。2006年には連携協定も交わし、更なる事業展開を推進。2008年度からは首都圏での地域連携事業として、飛鳥文化を通して日本の歴史・文化、そこに暮らす人々との交流について考える「かんだい 明日香 まほろば講座」を開催している。

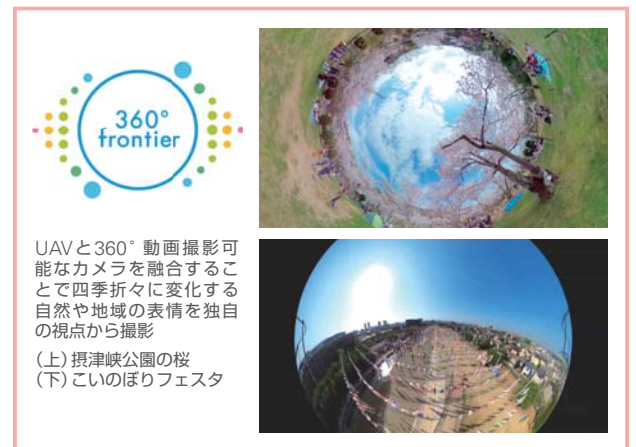
今回のテーマは「牽牛子塚古墳発掘100周年 八角形墳の造営された時代～牽牛子塚古墳と野口王墓～」。当日は約700人が参加し、國學院大學大学院客員教授の福尾正彦氏による講演や、明日香村教育委員会文化財課調整員であり関西大学非常勤講師の西光慎治氏による調査報告のほか、専門家によるパネルディスカッションなどが行われ、聴衆は熱心に聴き入った。

◎「360° frontier」プロジェクトが本格始動

## 上空からの全天球映像でまちの魅力を発信する無人航空機と360°動画撮影技術の融合



●総合情報学部学生による無人航空機操縦の様子



UAVと360°動画撮影可能なカメラを融合することで四季折々に変化する自然や地域の表情を独自の視点から撮影  
(上)摂津峡公園の桜  
(下)こいのぼりフェスタ

関西大学は、創立130周年記念事業の一つである高槻市との地域連携・地域貢献事業の一環として、産官学連携プロジェクト「360° frontier」を発足した。

このプロジェクトは、総合情報学部の教員と学生が情報技術と映像コンテンツ制作に関する専門性を生かしながら、株式会社大広、ブルーイノベーション株式会社と連携し、高槻市の協力を得て地域の魅力を再発見し活性化を目指すというもの。特に、無人航空機(UAV)と360°動画撮影可能なカメラを用いて、自然や歴史・文化、まちのにぎわいなど、まだ広く浸透していない地域の魅力を全天球映像コンテンツとして編集、蓄積していく。上空から全方位の情景を視野に置くだけでなく、閲覧者自身が風景を見渡す方向を切り替えながら、これまでにない視点でまちの魅力を

体験できる映像コンテンツを制作・公開していく。

プロジェクトに参加する総合情報学部の学生らは、UAVの安全対策や操縦技術について連携企業の専門家から指導を受け、実機による飛行訓練を重ねてきた。今後は、四季折々の魅力をテーマに映像コンテンツを撮影していくと共に、地域イベントや大学の催し等への参画、ウェブサイトや公共施設への掲出を通してプロジェクトの成果を幅広く発信し、地域コミュニケーションの新しいかたちを提案していく。

## ◎「淀川今昔明日ものがたりⅢ」を開催 超高精細デジタル化画像で『平家物語絵巻』をひもとく

5月29日から6月1日まで、グランフロント大阪ナレッジキャピタルにおいて、「淀川今昔明日ものがたりⅢ—平家物語絵巻から大坂画壇まで—」が開催された。このイベントは、浪花大阪の文化的資源の発掘と展示を行う学内連携プロジェクト「関西大学 VOLCANOプロジェクト」と、ナレッジキャピタル「ビジュアルゼーション・ラボラトリー大阪(VisLab OSAKA)」が、岡山県林原美術館、関西大学ならびに大阪研究センターPPEと共催したもの。

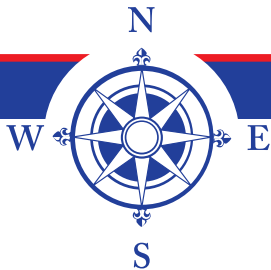
3回目となる今回は、源義経が、関大にゆかりの深い天満・福島地から瀬戸内海へ飛び出し、壇ノ浦の戦いに挑む様子が描かれた33mにも及ぶ『平家物語絵巻第11巻上および中』を最新のIT技



術を駆使し、超高精細デジタル化して公開。また、淀川をテーマとする作品が多い「大坂画壇」の作品もデジタル画像で紹介した。

画像はパソコン画面にタッチすると自在に拡大縮小でき、直径約2cmの人物の顔を40cm以上に拡大してもくっきり見える。来場者は最新技術を体感すると共に、貴族や武士のために描かれた『平家物語絵巻』と庶民を対象に描かれた「大坂画壇」の絵画という、淀川が結ぶ2つの歴史文化の奥深さに魅了された。





### 関西大学体育会が各方面で大躍進！

#### ● 陸上競技部の廣瀬亜美さん、戒田規彰さんが快挙



(写真・上) 陸上競技部 廣瀬亜美さん  
(写真・下) 陸上競技部 戒田規彰さん  
(写真提供：関大スポーツ編集局)

6月12日、神奈川県で行われた2015日本学生陸上競技個人選手権大会において、体育会陸上競技部の廣瀬亜美さん(文3)が女子1500mで3位入賞を果たした。

また、5月14日～17日、大阪市・ヤンマースタジアム長居で行われた第92回関西学生陸上競技対校選手権大会では、同部の戒田規彰さん(人4)が男子800mで大会新記録・関西学生新記録を更新し、見事、優勝を飾った。

#### ● 射撃部の八川綾佑さんが、ISSFジュニアカップで優勝

6月29日、ドイツで行われた2015年度ISSFジュニアカップにおいて、体育会射撃部の八川綾佑さん(文1)が男子10mAR60発競技で優勝し、ジュニアの部で世界一に輝いた。



また、7月4日～5日、埼玉県で行われた第11回日本学生選抜ライフル射撃選手権大会では、同部が女子10mAR立射40発競技で団体優勝を果たし、喜びに沸いた。



(写真・上中央) 射撃部 八川綾佑さん  
(写真・下) 射撃部 女子10mAR立射40発競技団体優勝  
(写真提供：関大スポーツ編集局)

### 第38回総合関関戦開催 関西大学と関西学院大学の体育会が熱戦！

6月11日～13日、伝統の交流戦「総合関関戦」本戦が開催された。38回目を迎えた今年のスローガンは「轟」。両チームが全力で戦い、人々に感動を与える総合関関戦を全国に轟かせる。また、「轟」という漢字の構造のように各クラブの力を一致団結するという2つの意味が込められている。

アイスホッケー部が19大会連続、射撃部が16大会連続、ボクシング部が11大会連続で勝利し、相撲部が8大会ぶりに勝利を果たすなど健闘するも、総合成績は関西大学の11勝20敗3分前で、関西学院大学の勝利。通算成績は関西大学の16勝21敗となった。



◀ 8大会ぶりに勝利を果たした相撲部  
(写真提供：関大スポーツ編集局)

### 中国語コンテストで、上野美幸さんが堂々の優勝

5月23日、福岡・北九州市立大学で行われた2015年度日本五星奨—中国語コンテストにおいて、学術研究会中国語研究部の上野美幸さん(経3)が暗唱の部(学習歴1年未満)で優勝した。



「2015年度日本五星奨—中国語コンテスト」暗唱の部で優勝した上野美幸さん  
(写真提供：学術研究会中国語研究部)

### 広告「関大は卒業できません」が 読売新聞広告大賞優秀賞を受賞

新聞広告「関大は卒業できません」が、第31回読売広告大賞「アドバイザーの部」において優秀賞を受賞した。



この広告は、新しい世界へ踏み出しても、関西大学の「人」を卒業することはなく、これからも関西大学の「人」らしく世の中を元気にしてほしいという卒業生へのメッセージ。3月20日の卒業式に合わせて掲出し、会場でも配付した。

◀ 「アドバイザーの部」学術部門において優秀賞を受賞した、新聞広告「関大は卒業できません」

### 第5回大阪マラソンに協賛 マラソンを通じて大阪の街を元気に



▲ 関西大学特別枠ランナー  
◀ 給水ボランティア

(写真はいずれも昨年の様子)

大阪府・大阪市などが主催する第5回大阪マラソンが10月25日に開催される。

関西大学は2011年の第1回からオフィシャルスポンサーとして大会運営に協力し、大阪の盛り上げに貢献してきた。今大会も本学から給水ボランティア約400人をはじめ、語学対応やチャリティ募金、清掃のボランティア達が活躍する。また、関西大学特別枠ランナーとして20人の学生・教職員が出場予定。関西大学の代表として大阪の街を駆け抜ける。